

修士論文（要旨）

2014年7月

「ごみ屋敷」に居住する高齢者に対する支援プロセスについての研究  
—地域包括支援センターの関わりに焦点を当てて—

指導 白澤政和 教授

老年学研究科

老年学専攻

212J6003

金子里奈

## 目次

I : 諸言	1
1. 研究の背景	1
2. 先行研究	2
3. 研究目的	4
II : 研究方法	4
1. 調査対象者	4
2. 調査方法	4
3. 倫理的配慮	5
4. データの分析方法	6
III : 結果	6
1 : ストーリーライン	6
2 : カテゴリー、概念の詳細	10
IV : 考察	37
1. ごみやしきの発見	37
2. 地域の連携	38
3. ごみ屋敷の住人との関係構築	39
4. 生活の継続支援	40
5. 本研究の限界と今後の課題	41
V : 結語	41

### 【謝辞】

### 【引用文献】

### 【参考文献】

### 資料

<表1 インタビューガイド>

<図1 「ごみ屋敷」に居住する高齢者に対する支援プロセスについての研究—地域包括支援センターの関わりに焦点を当てて—の概念図>

分析ワークシート

1.研究背景：孤独死・孤立死といった社会問題が近年あげられている。また、乱雑や不衛生的な住居環境の末、これが原因となって火事が発生したり、近隣に悪臭が漂うといった問題が起きているケースがある。セルフ・ネグレクトが著明であるものに「ごみ屋敷」があり、地域からは問題視されることがしばしばある。「ごみ屋敷」に居住する高齢者は「接近困難」「関係困難」「援助困難」であることが多い故に「支援困難事例」となることが多く、また自分自身への虐待と考えられることから「ごみ屋敷」問題の解決には、主として地域包括支援センターが関わり対応することとなった。

2.先行研究：「ごみ屋敷」については雑誌やテレビで時折特集が組まれているが、調査や研究をもとにした論文は非常に数少なく、研究途上である。だが、セルフ・ネグレクトの一環として取り上げられていることがある。セルフ・ネグレクトは自分自身による自分自身へのネグレクトであり、自分を放置・放任することにより、時間をかけて自分の健康や安全が損なわれていくことである。これが「ごみ屋敷」に居住する高齢者にも当てはまり、セルフ・ネグレクトが著明な典型事例として挙げられている。セルフ・ネグレクトと「ごみ屋敷」に共通するものは、「独り暮らし」「社会と無縁」「社会的な介入を頑なに拒む」ことである。

3.研究目的：本研究は「ごみ屋敷」に居住する高齢者に対する支援過程について地域包括支援センターの関わりに焦点をあて、「ごみ屋敷」解決への支援過程を明らかにし、対応方法を示唆することにある。

4.調査対象者と方法：ごみ屋敷が発生した理由のひとつとして、ごみが捨てにくいことや近隣住民と関係性がつくりにくいといった環境・地域の特徴が推測された。よって、都市部や農村部を配慮して、「ごみ屋敷」の問題を解決した経験がある大阪府・兵庫県・神奈川県 8 か所の地域包括支援センターの職員 9 名より協力を得られた。面接調査の期間は 2013 年 10 月から 2014 年 3 月で、調査対象者に合わせ、地域包括支援センター内で準備してもらったプライバシーが保障される場所に出向き実施した。面接時間は 43 分から 72 分で、平均すると 54 分であった。インタビューの内容の録音は、開始時に対象者の同意を最終確認し、同意を得たうえで後に逐語化している。

5.データの分析方法：データ分析は、木下（2003）によって開発された、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（=Modified Grounded theory Approach）（以下 M-GTA）を用いて行った。面接（インタビュー）調査を前提に考案されており、現場でその実践者により応用の幅を生み、さらなる検証から理論の発展をも見込むことができるといったことが M-GTA を採用した理由のひとつである。

6.分析結果：分析の結果、生成された概念は 43 概念となり、5 つのカテゴリー、9 つのサブカテゴリーを生成した。【包括がごみ屋敷を認識する】【地域の人々や他部署との関係構築】【住人との関係構築】【大掃除の実施過程】【生活の継続支援】がカテゴリー名である。

7.考察と今後の課題：潜在型ごみ屋敷の早期発見、介護予防事業における閉じこもり予防・支援、地域包括支援ネットワークおよび地域包括ケアの構築、住人の生活継続のためにストレングス支援、次世代を担う子ども達の家庭や学校といった社会での人間教育・地域教育を課題としてあげた。

## 参考文献

- ・厚生統計協会『図説 国民衛生の動向 2010/2011.』財団法人 厚生統計協会、2010.
- ・内閣府『高齢社会白書』内閣府、2011.
- ・佐藤眞一『ご老人は謎だらけ—老年行動学が解き明かす—』株式会社光文社、2011.
- ・井森佳恵「地域保健のトピックス いわゆる“ゴミ屋敷”介入困難事例としてのディオゲネス症候群、老人性隠遁症候群. 認知症の最新医療,」1(3)、140-143 頁、2011.
- ・高山朱実:「消えた高齢者」が発した社会への警鐘.」高齢者虐待防止研究、7(1)、19-23 頁 2011.
- ・春日武彦「援助学「ゴミ屋敷」とは何か」 ケアマネジャー、14(5)、32-37 頁、2012.
- ・塩坂佳子「「匂いがきつい」「火事が不安」と不満噴出 周囲が恐れるゴミ屋敷 その住人に迫った」 婦人公論、96(15)、122-125 頁、2011.
- ・津村智恵子「セルフ・ネグレクト防止活動に求める法的根拠と制度支援」 高齢者虐待防止研究、5(1)、61-65 頁、2009 年.
- ・野村祥平「高齢者のセルフ・ネグレクトに関する先行研究の動向と課題」ルーテル大学研究紀要、(41)、101-116 頁、2007 年.
- ・岸恵美子『ゴミ屋敷に棲む人々—孤立死を呼ぶ「セルフ・ネグレクト」の実態』株式会社幻冬舎、2012 年.
- ・多々良紀夫・二宮加鶴香『老人虐待』筒井書房、1994 年.
- ・津村知恵子・入江安子・廣田麻子「高齢者のセルフ・ネグレクトに関する課題」大阪市立大学看護学雑誌、(2)、1-10 頁、2006 年.
- ・岸恵美子・吉岡幸子・野村祥平「専門職がかかわる高齢者のセルフ・ネグレクト事例の実態と対応の課題」高齢者虐待防止研究、7(1)、125-138 頁、2011 年.
- ・井上信宏「一人暮らし高齢者の「住まい」と社会的孤立—「ゴミ屋敷」を通して見えるニーズと社会福祉の役割」社会福祉研究、(110)、113-121 頁、2011 年.
- ・根本治子「孤立した高齢者の死に関する一考察」花園大学社会福祉学部研究紀要、(17)、76 頁、2009 年.
- ・高齢者が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議、「孤立死ゼロを目指して」報告書、1-11 頁、2008 年.
- ・岸恵美子・吉岡幸子・野尻由香「セルフ・ネグレクト状態にある独居高齢者の特徴」  
帝京大学医療技術学部看護学科紀要、(2)1-21 頁、2011 年.
- ・肥沼位昌『あのごみ屋敷をなんとかしてと言われたら』第一法規、132 頁、2009 年.
- ・安村誠司『地域ですすめる閉じこもり予防・支援—効果的な介護予防の展開に向けて』中央法規、2006 年.
- ・広井良典『コミュニティを問い直す—つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書、215 頁、2009 年.
- ・白澤政和『地域のネットワークづくりの方法—地域包括ケアの具体的な展開』中央法規、2013 年.
- ・水巻中正・安藤高朗『医療と介護の融合—2012 年への提言と実践』日本医療企画、2010.
- ・白澤政和『ストレングスモデルのケアマネジメント—いかに本人の意欲・能力・抱負を高めていくか』ミネルヴァ書房、2009.
- ・高田さやか「親亡き後の障がい者支援の一考察—ゴミ屋敷住人の支援の事例から—」大阪市社会福祉研究、(36)、11-13 頁、2013 年.
- ・村田らむ『ゴミ屋敷奮闘記』有峰書店新社、2014.
- ・NHK「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会—無縁死三万二千人の衝撃—』文藝春秋、2010.
- ・東京大学高齢社会総合研究機構『2030 年 超高齢未来』東洋経済新報社、2010.
- ・安田雪『ネットワーク分析—何が行為を決定するか—』新曜社、2007.
- ・「特集 Steep で Deep な援助学 ゴミ屋敷援助考(3)ゴミ屋敷にどうかかわるか」ケアマネジャー、14(6)、34-39 頁、2012.
- ・木下康仁『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法』弘文堂、2007.
- ・木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂、2007.